

香川県における服飾デザイナー・服飾教育の先駆者

吉田愛の事績

－吉田愛服飾専門学校の創設と展開を中心として－

齊藤佳子

1. はじめに

本研究の目的は、香川県における服飾系私立各種学校においてなされた教育事象の一端を明らかにすることにある。高松市の現・吉田愛服飾専門学校の創設者である吉田愛の服飾デザイナーとしての活動と洋裁教育について、実践を支えた動機や思想、またカリキュラムの変遷を社会的経済的状況のなかに位置づけながら実証的に分析し、戦後の復興期から経済成長期の教育制度上の学校以外で行われていた女子教育の実態はいかなるものかを検討することを目的としている。

「各種学校」の教育史的位置づけの意義については、土方が「各種学校の歴史的研究」¹⁾を通して、「各種学校を制度化された学校同様に近現代に必然的な存在としてとらえるべきではないか」と言及している。なお明治期の各種学校については、土方ら研究グループによる成果²⁻³⁾に詳しい。

一方、日本の女子教育史において、「各種学校」における裁縫・編物を含む手芸全般を対象にした教育事象の詳細を示す研究はほとんどなされていない。小山⁴⁾が指摘するように、裁縫女学校の研究を欠落させているのは、女子中等教育史の全体像は解明されない。また朴木⁵⁾が述べているように、戦前の家事科・裁縫科教育を対象とした研究の多くは小学校と高等女学校に偏り、戦後の裁縫・編物手芸を専門とする各種学校の系譜にある実家高等女学校・各

種学校・実業補習学校・青年学校等の遅れは否めない。

このような状況にあって、洋裁学校と洋裁教育に関連する研究では、横川ら⁶⁾による20世紀の関西における調査・研究をまとめた広汎な成果⁷⁻¹¹⁾がある。それは女性の仕事や活動に結びついた洋装化や洋裁、洋裁教育を「洋裁文化形成」という観点から捉える試みであり、洋裁文化形成に関わった人々と諸機関の内容や果たした役割について実態を明らかにしている。『洋装文化形成に関わった人々とその足跡－インタビュー集－』その1～4⁷⁻¹⁰⁾は、洋裁店・百貨店のデザイナーや洋裁学校で洋服を製作したり、デザイナーを養成したりした女性たちの活動を記録している。また『関西における洋装文化形成に関する研究（関西文化研究叢書11）』¹¹⁾では、関連資料の発掘と整理、そして分析をし、洋裁店の興亡やNDC（日本デザイナークラブ）の果たした役割、月刊誌『ファッション』の洋裁記事の内容などについて明らかにしている。さらに洋裁学校について、現在の大谷女子専門学校、神戸ドレスメーカー女学院と武庫川学院女子大学を取り上げ、創設から学校の隆盛および洋裁教育とその後の変遷を明らかにしている。例えば、青木は、昭和の戦前期の服飾デザイナーについて「第二世代の服飾デザイナー」¹²⁾と定義し、関西の洋裁学校を運営していた服飾デザイナーに着目し、『洋裁文化形成に関わった人々とその足跡－インタビュー集－その1』で取り上げた大丸ドレスメーカー初代院長磯村春に関して検証している。また松井は、愛媛県の洋裁学校について、数校の創設者へのインタビュー調査と行政資料から探る学校数と生徒数の数値的な移り変わりを中心に論考している。

平成26年1月8日受理

連絡先 〒769-0201 香川県綾歌郡宇多津町浜一番丁10番地

香川短期大学 生活文化学科

TEL 0877(49)5500 FAX 0877(49)5252

Email ysaito@kjc.ac.jp

本稿では以上の先行研究を受け、管見の限り研究のみられない香川県における洋裁学校いわゆる服飾系各種学校について、事例として現在の吉田愛服飾専門学校を取り上げ、創設者である吉田愛の人物像やその洋裁教育に焦点をあてて検討する。同校を対象とする理由は以下のふたつが挙げられる。第一に、吉田愛について、青木の定義する「第二世代の服飾デザイナー」として注目できるという点にある。次いで第二に、同校は高松で最も古い洋裁学校であるだけでなく、1976（昭和51）年に本格的な服飾の専門学校として、県下では第一号認可を受け存続していることから、地域においてなされた洋裁教育の実態を明らかにできると考えられる点にある。研究方法は、「数字やデータでは語ることのできない」人の生き様へのアプローチや、文章として残された書物（文献）におけるさまざまな精神的現実を読み解く「質的研究」¹³⁾を採用した。現・校長である吉田弘子氏への聞き取り調査、同校所蔵の文書、発行された機関紙『まど』、吉田愛の著作（エッセイ集）『服飾デザイナー吉田愛60年のあゆみ』、新聞等に掲載された吉田愛や学校関連の記事を主とした文献研究に拠ることとする。

2. 生い立ちから洋裁研究所の開設まで

まず、創設者である吉田愛の生い立ちから吉田洋裁研究所の開設までを概観する。『服飾デザイナー吉田愛60年のあゆみ』¹⁴⁾の序文¹⁵⁾によれば、吉田は1910（明治43）年、現在の三木町氷上に生まれた。祖父と父は村長または県議会議員として長く郷土の発展に努めたという人望の温い家庭で育った。木田高等女学校（現在の高松東高等学校）卒業後に高松市に近い当時の一宮村周辺の三か村の世話をしていた大庄屋の吉田家に嫁いだ。

吉田の洋裁の勉強は結婚してからで、ミシンを買ってもらい、家族の洋服を縫ったのが最初である。独習で洋服を縫っていたのが、後に洋裁を職業とするきっかけである。結婚後、「女性として一生役立つ技術を身につけたい」¹⁶⁾と考えるようになった。銀行員の夫が体調を悪くし、勤められなくなったために、洋裁で家族を養うこととなった。吉田家の再興と家族の生活を支えるという重い責任を背負

い、服飾デザイナーに収入の道とドレス作りへの夢を託すこととなる。当時のことを、吉田は「私が最初に洋裁に魅力を感じ、そして習い始め、それを経済的な面に結びつけることを思いつきましたのが今から36年前、そして洋裁を本格的に勉強しようと思いたちましたのが昭和10年です」¹⁷⁾と振り返っている。

1935（昭和10）年、吉田が24歳の時に4歳の長女（岩田稔子氏）、生後10か月の次女（磯貝博子氏）の二人の子を姑に預け、洋裁を学ぶために単身大阪へ向かった。大阪では梅田の伊東茂平洋裁研究所の速成科に入学し半年間学んだ¹⁸⁾。入学の決め手は、当時、新進デザイナーとして評判の高かった田中千代氏にあこがれており、同研究所のパンフレットに指導者の一人として田中氏の名前があったからである。しかし「名前だけで顔さえ見なかった」¹⁹⁾。

そこで翌1936（昭和11）年、神戸市御影（芦屋）の「田中千代洋裁教室」へ入学した。そこではデザインを専攻して、意匠学、服装史、色彩について2年間学んだ。またロシア人のサ・マリッチ氏より手芸（フランス刺繍）の手ほどきを受けた。吉田は当時のことを「関西での勉強時代は、主人と子供二人を郷里に残し、下宿から学校へ通いました。『何が何でも一人前に』との意気込みがありました」²⁰⁾また「高松に残した下の子の泣き声が耳について…。悲しい思いで一生懸命勉強しました」²¹⁾と語っている。吉田にとって心からの笑いを忘れて昼夜なく勉強の日々が続いた。そして卒業後の1939（昭和13）年4月10日に神戸で「吉田洋裁研究所」を開設した。

吉田の洋裁技術について、中山²²⁾が述べているように「戦前の洋裁学校は、職業人ドレスメーカーの養成を目的とした。当時の簡単なスタイルは、洋裁学校の短期修業でも、職業的養成が可能であった。また、一般の洋裁技術水準が低く、洋裁学校卒業生の技術も職業として通用した」と考えられる。

3. 神戸の洋裁研究所開設から戦後の高松の洋裁教室再開の頃の様子

洋裁研究所創設の経緯は家庭事情で生活のためであった。1938（昭和13）年、神戸の六甲のアパートに「吉田洋裁研究所」を開設した（表1・2）。ア

表1 吉田愛略歴

1938 (昭和13) 年	吉田洋裁研究所開設 (神戸市)
1940 (昭和15) 年	吉田洋裁教室併設 (高松市番町)
1956 (昭和31) 年	高松市民学校講師 青年学院講師
1960 (昭和35) 年	国際連合香川県本部理事 日米協会理事
1961 (昭和36) 年	高松市民学校講師 香川県意匠保護審議会委員
1963 (昭和38) 年	NDC (日本デザイナークラブ) 正会員に推薦される
1964 (昭和39) 年	米国フロリダ州セントピーターズバーグ市長より名誉市民の称号を受ける
1969 (昭和44) 年	パリのエコール・ゲール・ラビニユン洋裁学校の夏期講習会に参加修了証を受ける
1972 (昭和47) 年	学校法人田中千代学園短期大学評議員
	学校法人田中千代服飾専門学校評議員
	学校法人田中千代服飾専門学校同窓会 香川県支部長
1974 (昭和49) 年	高松市特別職報酬審議会委員
1976 (昭和51) 年	高松市表彰審議会委員
1977 (昭和52) 年 2月	百十四銀行教育文化振興会より表彰状を受ける
1978 (昭和53) 年 5月	香川県知事より感謝状を受ける
	私学功労者として知事表彰を受ける
1978 (昭和56) 年11月	服飾教育文化賞を受ける
1978 (昭和56) 年12月	中華民国中国文化大学にて「服飾と人格について」講演する
1979 (昭和57) 年 5月	香川県公民館連絡協議会より感謝状を受ける
1982 (昭和60) 年 7月	専修学校教育に多年貢献した功績により文部大臣の表彰を受ける
1984 (昭和62) 年 5月	昭和天皇陛下より教育功労により勲五等瑞宝章を賜る
1990 (平成2) 年10月	服飾資料館「エレガンス愛」開館
1991 (平成3) 年12月	韓国にて留学生の結婚祝いファッションショーを開催
1994 (平成6) 年 5月	四番町公民館に講座を開講
1994 (平成6) 年 8月	専修学校開放講座を開講
1994 (平成6) 年10月	ねんりんピックシルバーファッションショーに参加

(「服飾デザイナー吉田愛60年のあゆみ」より作成)

表2 吉田愛服飾学園創立35年沿革史

1938 (昭和13) 年 5月	吉田洋裁研究所を神戸市に開設
1940 (昭和15) 年 4月	吉田洋裁教室を高松市番町に併設
1946 (昭和21) 年	高松において四国で最初のファッションショーをヤングで開催
1948 (昭和23) 年	香川県公認洋裁学校の認定を受ける
1956 (昭和31) 年	日米婦人大学講座 (日米婦人をモデルとして高松市公会堂で作品発表を行う)
1958 (昭和33) 年	国連協会より感謝状を受ける
1963 (昭和38) 年 5月	米国フロリダ州 セントピーターズバーグ市で親善ゆかたショーを開催 好評を博す
1963 (昭和38) 年11月	米国フロリダ州 セントピーターズバーグ市で第二回親善シルクショーを行う
1964 (昭和39) 年 7月	園長渡米, 米国フロリダ州 セントピーターズバーグ市でハッピーショウとゆかたオリジナルショーを開催
	シスターシティの親善を深めて大成功をおさめる ゴールドナー市長の名誉市民の称号が贈られる
1966 (昭和41) 年 4月	横浜市に分校を新設
1968 (昭和43) 年11月	吉田愛服飾学園創立30周年記念
	本校より田中千代学園長を迎える19世紀から20世紀後半までの世界のモードコスチュームショーを盛大に開催
1969 (昭和44) 年 6～7月	パリ, エコールゲールラビニニ洋裁学校の夏期講習会受講, その他のヨーロッパ各地の服飾の旅に参加
1969 (昭和44) 年 9月	香川県老人福祉救護事業振興会から老人福祉に貢献したことにより感謝状を授与される
1969 (昭和44) 年10月	高松市社会福祉協議会から老人福祉に貢献したことにより感謝状を授与される

(「田中千代認証校 吉田愛服装学園」パンフレットより作成)

パートの一室にミシン、裁断机各1台のみでの出発であった²³⁾。当時は、在日ドイツ人からの仕事も依頼された。外国人は仕事に厳しかったが、作品の出来で、正しく評価してくれることを知った²⁴⁾。その頃は神戸という「都市でも数少ない洋裁の勉強の場として、かなり評判となった」²⁵⁾。

また戦時中の1940(昭和15)年春、高松市番町の自宅に「吉田洋裁教室」を併設した。吉田は神戸と高松間を往復して洋裁指導にあたった。高松では洋裁を習う女性は少なく、「高松教室の生徒はサシを手丸亀町を闊歩していた」といわれるほど「選ばれた人」だった²⁶⁾。その頃は品物がとても少なく物資の不自由な時代であり、教材のスリッパをゆかた地で、ワンピースをキャラコで作った²⁷⁾。

第一次世界大戦終戦から第二次世界大戦の頃の洋装の普及について、第一次世界大戦後には男性に比べて遅れていた女性の洋装化が進んだが、太平洋戦争は厳しい物質不足をもたらし、成人女性の洋装化は再び停滞した²⁸⁾。高松では戦時中の1940(昭和15)年8月から一部衣料品関係も切符制が導入された。そして1942年(昭和17)年には、衣料品全般にわたる「衣料配給規則」、「衣料品切符規制」が採用されている²⁹⁾。

その後、吉田は戦時体制下で1945(昭和20)年3月に教室を閉鎖したが、戦災で2校とも失った。しかし戦争直後の1945(昭和20)年11月に高松で教室を再開した。生活のために、疎開していた嫁入り箆箆に晴れ着、宝石などを全部処分してミシン、裁断机各1台とボディー一体から授業を開始した³⁰⁾。

洋裁教室再開の頃、「愛先生ですネ。洋裁を教えてください」と吉田の名前を確かめてからの入学依頼の若い女性であふれた³¹⁾。また、当時の高松には連合軍が進駐しており、昼夜を問わずに連合軍将校婦人の夜会服(イブニングドレス)の製作をした。バラックの教室には米兵、連合軍の兵士、中にはインドの聖翁ガンジーの甥等やその婦人達の賑やかな訪問に始まり、やがて元ミスニューヨークのミセス・ディーターのドレス作りが評判となった。それ以後は夜会服製作に追われた。しかし「礼を失した婦人達の依頼には絶対応じなかった。愛なりの信念があった」³²⁾。この連合軍将校婦人の夜会服の製作は、吉田の服飾デザイナーとしての独自の実践として特

筆できる。筆者がこれまでに調査を実施した高松市所在の他校「白ゆり服装学院」(現在は閉校)、「シャルムドレスメーカー専門学校」(いずれも1948(昭和23)年に私立各種学校として認可され、1976(昭和51)年に専修学校となった)ではみられない活動である。

一方、当時の日本人の衣生活の様子はどうであったか。戦時中、雑誌などで盛んに使われた言葉に、「更生服」がある。古い和服や洋服、寝具などを再利用して仕立てた、主に女性や子どもの衣服を指す言葉で、新しい生地の手入が困難であったために、大いに推奨された。この言葉は戦後の婦人雑誌にも引き継いで多数登場していた³³⁾。戦争終戦直後に吉田洋裁教室へ入学した卒業生の体験談によれば、「焼け跡の教室に実技の材料は母の着物、父のインパネス(当時トンビと呼ばれる黒いウールのマント)などを利用して製作した」³⁴⁾とのことであるから、「更生服」であったと推察できる。なお、1949(昭和24)年頃から日本の衣料事情は好転し始め、配給は次第に緩和され、1951(昭和26)年4月に、「衣料配給規則」および「衣料切符制」は廃止されている。

また旧職員の回想によると、洋服地が高松にたくさん出まわりはじめたのは昭和28・29(1953・1954)年頃からであり、その頃は多くの洋装店が開店した。布地も現在の何メートルではなく1ヤール(ヤール=70センチ)いくらで買っていた。ワンピースで3ヤール位必要だった。フレアスカート、ロングスカートが流行していた³⁵⁾。このようなスカートは1948(昭和23)年、戦後最初のファッションとして流行した。これは1947(昭和22)年春にクリスチャン・ディオールが発表した「ニュールック」の影響を受けている。ディオールは1953(昭和28)年に来日してファッションショーを開催しているが、当時の女性のあこがれであった。

4. 恩師田中千代氏との関係

吉田をはじめ、二人の娘(吉田愛服飾専門学校副校長を務めた岩田稔子氏、吉田愛横浜分教室主任を務めた磯貝博子氏)は田中千代学園を、そして孫(現・吉田愛服飾専門学校校長吉田弘子氏)は田

中千代学園短期大学と、三代そろっての卒業生である。弘子氏は初孫生徒という。吉田は田中千代服装学園の評議員、同窓会幹事、香川県同窓会長、洋裁チェーン四国地区委員を務めていた。

田中氏について、吉田は「田中先生には、洋裁の基礎をみっちりたたき込まれました。田中先生は1ミリ、2ミリもおろそかにしない厳しさでした。基礎は人間が伸びるための『栄養』であることを2年間でしっかり身につけました。生徒の指導に当たっては、このことを守り続けています。』³⁶⁾と述懐している。この教えは生涯、吉田の洋裁教育の指針となっていたようである。

教育活動については、1946(昭和21)年に四国で最初のファッションショーを高松のヤング(現在は閉鎖)で開催した。そして翌1947(昭和22)年6月に「吉田洋裁教室」は香川県公認洋裁学校の認定を受け「吉田愛服装学園」となった。次いで1949(昭和24)年には田中氏を迎え、高松市体育館でファッションショー「世界の民族服」を公開した。さらに1955(昭和30)年に四国で最初の田中千代認証校に認定された。なお1962(昭和38)年には、香川県公認洋裁連盟の田中千代チェーン校として、吉田愛服装学園の他にモード服装学園(高松)、佐々木服装学園(高松)、イズミヤ服装学園(観音寺)があったようであるが、現在はいずれも閉校しているため詳細はわからない。

また1962(昭和38)年11月21日に吉田愛服装学園25周年記念行事である「田中千代シルクショー」を高松市市民会館で開催した。この記念行事にあたり田中氏は次のような祝辞を述べている³⁷⁾。

吉田愛さんが私の御影の洋裁教室に勉強に来られたのは、ついこの間のように想っていましたら、早くも学校を創められてから25周年を迎えられ、本当におめでとうございます。

この吉田さんの25周年を、お祝いするために、この度び、私がデザインした日本の生地(帯地、きもの地、又日本の柄を別染めした)を主体として作った、日本の伝統を現代に生かしたもの、又、日本の印象をうたったものなど、日本人の心に秘むものを現そうとして作ったものです。

貿易自由の折から、本当の日本のもつ美しいものを海外に知らせたいと心をこめて作りこの春、パリ、ドイツ、イタリーでショーをしたものです。

25年間の吉田さんの筆には尽くせない仕事への愛情、努力、そして、その誠意にこたえる為のおくりものと思っております。(略)

さらに1972(昭和48)年に創立35周年を迎えた際には、田中氏は次のように述べている。

「毎年、元旦には高松から東京にオメデトウとその年の計画や心構えの長距離電話がかかってきます。互いに励ましあうひとときです。」

「…どの面を取り上げてみても、愛情の人、努力の人として、私はここに称賛の辞をお贈りしたい気持ちでいっぱいです。」³⁸⁾

また吉田も「仕事への自信をなくして絶望に迫られた時期もありましたが、そのつど恩師の温かい励ましと適切な教えに導かれて今日まで大過なく過ごせました(略)」³⁹⁾と語っており、卒業後も継続している田中氏への深い信頼をうかがい知ることができる。

さらにもう1つのエピソードを記しておきたい。「田中千代学園短期大学は吉田愛の進言で設立!？」されたのであろうか。『田中千代 日本最初のデザイナー物語』⁴⁰⁾220頁の2行目には「短大の設立は、卒業生の希望と千代自身の願いでもあった」という文章がある。吉田が所有していた同書において、「短大の設立は、卒業生の希望」という箇所は黒ペンの○で囲まれており、「吉田愛進言」という直筆の記述を確認できる。田中千代服装学園の評議員であったことから事実の可能性もある。故人となった今では立証は困難であるが、吉田がいかに母校を愛し、その発展を願っていたかを表わしていると思われる。以上のことから、吉田は田中千代氏と長年にわたる親しい関係にあったと言える。

5. 国際婦人として服飾で世界と友情

吉田の活動で注目できるのは、米国でのゆかた



資料1 1964年7月2日 セント・ピーターズ市長から吉田愛に贈られた名誉市民の称号



資料2 親善訪問中のファッションショーの写真
1968(昭和43)年『田中千代認証校 吉田愛服装学園』

ショー等、半世紀にわたる独自の洋裁活動を通しての日本らしさの紹介である。1987(昭和62)年4月29日付『朝日新聞』および『四国新聞』に掲載された記事から、吉田の国際交流への理念を確認することができる。

「私は日本語しか話せませんが、デザインの世界は心で通じるものなんです。他流試合をして、自分の技術を磨くためにも、外国人との交流は必要なんです。」

1987(昭和62)年4月29日『朝日新聞』(香川版)

「ファッションを通して、日本や世界のたくさんの方たちと出会い、多くの友情を育ててまいることができました。本当に、大きな温かい財産です。」

1987(昭和62)年4月29日『四国新聞』

1956(昭和31)年には、日米婦人大学の講師として、香川県公会堂で衣服構成の発展について講義をし、同時に当時の「コスチューム」を日本人だけでなく外国人をモデルに実物製作による実演した。また1963(昭和38)年に高松市の姉妹都市である米国のフロリダ州セントピーターズパーク市での親善ショーに出品した。5月に親善ゆかたドレスショー、そして11月に第2回親善シルクショーを開催した。次いで1964(昭和39)年7月に渡米し、米



資料3 昭和36(1961)年11月10日『毎日新聞』

国フロリダ州セントピーターズパーク市で親善オリジナルショーを開催し、名誉市民の称号を贈られた(資料1)。オリジナルショーでは日本の伝統的な美しさに郷土色を盛り込んだ作品を多数発表した。テーマは「日本の伝統的な紋章を用い日本的な

美しさを生かす」であり、日本のハッピを近代化したコート、ゆかた地・西陣織地のキモノやドレス、讃岐の特産保多織ののれんで製作したブラウス、風呂敷2枚で仕立てたツーピース、アクセサリー（香川県特産の絵日傘、遍路ガサ、うちわ、郷土人形）等の作品を発表した（資料2・3）。生地のは柄は日本情緒あふれる図柄で代表的な松・竹・海や鶴・カギなどを図案化したものや外国人に珍しがられるひらがな文字を配したものであり、生地はブロード、色は紺系統を基調に石井輝夫氏（当時、香川大学助教授）の指導で手染めにしたオリジナルなものを使用した。これら作品の中には田中千代氏が1950・1951（昭和25・26）年頃に発表した「ニューきもの」の影響を受けたと思われるものがある。例えば、資料2の右のドレスは、縦縞の着物の生地を用いた日本調のドレスであるが、田中氏もパリのホテル・クリオンで開催されたコレクションで、縦縞の着物生地を用いたドレスを発表している（資料4）。また資料2の左右のモデルは日傘を持っているが、田中氏もコレクションで日本傘を取り入れている（資料5）。さらに資料6・7のようにデザインやモデルのポーズも酷似している。

また外国人の訪問もあり、1975（昭和50）年8月30日には、日本のアメリカ大使館・文化広報担当者として来日していた日本文化センター第二代館長ハリ・H・ケンダル氏が学園を訪れ、授業を参観している⁴¹⁾。さらに米国フロリダ州セントピータースバーグ市の使節団の一行23名の高松市訪問に尽力したり、1987（昭和62）年3月には「日韓服飾文化交流の集い」という記念行事を開催したりする等、高松という地域から洋裁、ファッションショーを通して日本らしさ、伝統美と郷土色を発信した。当時、吉田は香川県国連本部理事、香川県日米協会理事などを務めていた。

加えて台湾、韓国で講演をし、1990（平成2）年10月には校内に「服飾資料館」（エレガンス愛）を開設（現在は閉鎖）し、韓国、マレーシアの結婚衣装や礼服14点、東南アジア・南米など約35カ国の手工芸品を約100点を展示した。これに関して1987（昭和62）年4月29日付『四国新聞』には、吉田が各国の民俗衣装や服飾に関する資料を取めた「服装基礎資料室」の開設を構想・計画していたことが掲



資料4 ホテル・クリオンにて発表された田中千代コレクション①
『吉田愛服装学園 創立二十五周年記念 田中千代シルクショー』

載されている。

6. カリキュラムにみる吉田愛服装学園の教育内容

学則により、どのような洋裁教育がなされていたかについて確認できる。入手できた学則は、1966（昭和41）年4月のものである。その第一章・総則・第一条によれば、目的は「本学園は新時代の日本女性にふさわしい服装知識とその専門的な技術指導を行い併せて人格の練磨を以って目的とする」となっている。単なる洋裁教育のみならず人間形成において「人格の練磨」という理念を掲げていたことがわかる。

次に教育内容について検討してみる。確認することのできる学科・カリキュラムの変遷は表3～7の通りである。表6に示した1959（昭和34）年度から教科がかなり増加し、充実したカリキュラムとなっ



資料5 ホテル・クリヨンにて発表された田中千代コレクション②
『吉田愛服装学園 創立二十五周年記念 田中千代シルクショー』

たことがうかがえる。その理由として、娘で教師の博子氏が「ファッション」を学ぶために1956（昭和31）年にニューヨークのザ・トラベージェン・ルクル・オブ・ファッションに3年間留学、また再度渡米し入学したアート・スチューデントリーグ美術学校でのファッション・イラストレーションなど、帰国後にそれらの授業内容や指導方法を取り入れたからだと考えられる。表5に示すように、昭和31年度（1956年度）の科目は「洋裁」と「製帽手芸」のみであったが、博子氏の帰国後の昭和34年度（1959年度）の科目は、表6に示すように教育内容が細分化され17科目へと大幅に改定された。ちなみにザ・トラベージェン・スクール・オブ・ファッションへは恩師の田中氏も1931（昭和6）年に留学している⁴²⁾。

また1968（昭和43）年の学科とその教育内容⁴³⁾をみれば、本科、師範科、専攻科、特別選科の4つの学科があり、本科のみ夜間課程の二部制あった。本科では、入学資格は「中学卒業又は同等以上の学力を有する者」で、年齢は15歳以上を対象として、初歩作図から応用作図、型紙差込法、裁断技術を教えていた。教材は婦人子供服中心で下着類から開始



フランスソワール紙、パリジェンヌのための日本モード日本の最新モード

資料6 フランスソワール紙のパリジェンヌのための日本モード日本の最新モード
『吉田愛服装学園 創立二十五周年記念 田中千代シルクショー』

し、ブラウス、スカート、ワンピース、アフタヌーン、カッターシャツ、子供服、婦人スーツ、オーバーを製作した。次に師範科は将来指導者や商店経営を目指す人を対象とし、デザイン感覚の勉強を取り入れ、体型製図の応用を教えていた。さらに専攻科は師範科を修了した人を対象としており、デザイン、スタイル画、クローゼットなどのより高度な研究を教授していた。また特別選科は本科師範科2年間の過程を1年の短期間に修了するクラスであった。

そして生徒達の作品発表会を毎年開催していた。それは、自分でデザインし、縫製して出来上がった作品を自分自身がモデルとして着用する、いわゆる自作自演のショー形式であった。本科生はワンピース

表3 昭和26年度(1951年度)4月の部科別授業科目と時間数

年月日	一週間に行う部科別の授業科目及びその時間数				
昭和26年 4月20日	部科名	本科	研究科	師範科	自由科
	科目名	時間数			
	洋裁 (製図 実習)	18	18	3	
	美学	1	2	3	
	手芸	2	2	2	
	計	21	22	8	

表4 昭和26年度(1951年度)5月の部科別授業科目と時間数

年月日	一週間に行う部科別の授業科目及びその時間数				
昭和26年 5月31日	本科	研究科	師範科	自由科	
	科目名	時間数			
	洋裁	25	20	20	
	美学		5	5	
	計	25	25	25	

表5 昭和31年度(1956年度)の部科別授業科目と時間数

年月日	一週間に行う部科別の授業科目及びその時間数				
昭和31年 4月25日	本科 昼間部	本科 夜間部	師範科 昼間部	師範科 夜間部	
	科目名	時間数			
	洋裁	22	22	16	16
	制帽手芸	11	11	8	8
	計	33	33	24	24

ス、師範科生はスーツ、専攻科生は扱いが難しい素材であるシルク、レースなどを使用し、それぞれの作品を技術の成果として全力でぶつかって製作した⁴⁴⁾。

表7は1968(昭和43)年当時の授業科目と時間数である。洋裁に関連のある科目の他に教養講座といった一般教養科目を設けていた。また「ニューキモノ(きもの)」という科目があり、田中千代認証校として、田中の影響はかなり大きかった様子がわかる。

さらに注目すべきは「クリスチャン・ディオール科」である。1973(昭和48)年度より高等裁断・裁縫専科として特設⁴⁵⁾し、現校長の弘子氏によれば10

表6 昭和34年度(1959年度)の部科別授業科目と時間数

年月日	一週間に行う部科別 授業時間数				
昭和34年 5月20日	本科 昼間部	本科 夜間部	師範科 昼間部	師範科 夜間部	
	科目名	時間数			
	ボタンメーキング	4.3	2.7	2.9	2.7
	カッティング	1.8	1.7	1.7	1.3
	縫方	3.6	1.7	1.7	1.1
	基礎縫い部分縫い	3.4	3.4		
	実習	3.9	3.9	1.7	1.7
	ドレーピング	1.5	1.1	1.5	1.5
	フッティング			1.1	1.1
	製図理論			4.2	4.1
	意匠史学			1.1	1.1
	手芸	1.1	0.8		
	ドレスデザイン			0.5	0.5
	服装史			0.5	0.5
	ファッションドローイング			1.1	1.1
	教養講座	2.7	1.5	2.7	1.1
	ニューきもの			1.7	0.8
	色彩学	1.1		1.1	
	制帽	1.1	0.8	1.1	1.1
	計	25	20	25	20

表7 昭和43年度(1968年度)の部科別授業科目と時間数

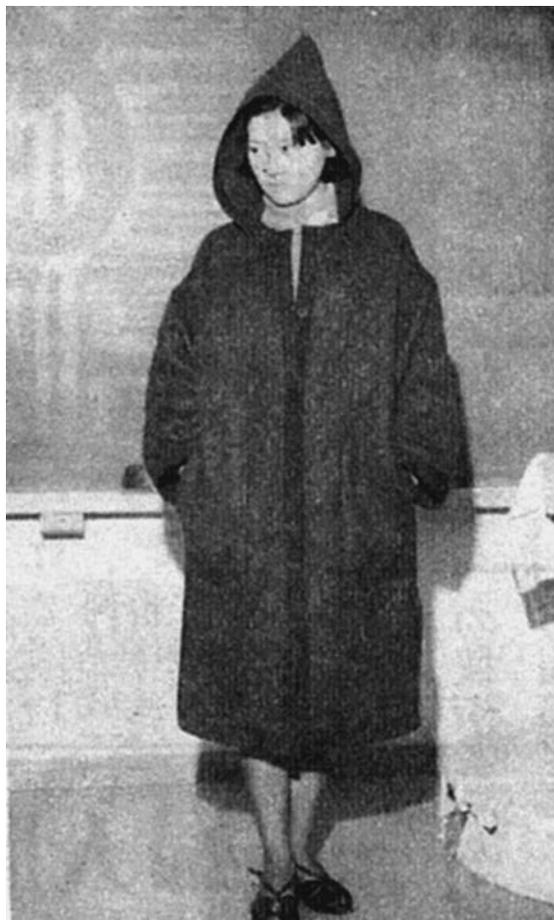
昭和43年授業科目と時間数			
学科名	昼間部授業時間数		
	本科	師範科	専攻科
ボタンメーキング	180	180	200
カッティング	75	70	40
ソーイング	250	200	40
基礎縫い部分縫い	150	150	100
フィッティング		60	40
ドレーピング		50	50
製図理論	230	150	150
ドレスデザイン		50	150
服装史			50
手芸	60		
制帽		20	
ファッションドローイング			250
教養講座	40	40	
ニューきもの		10	
色彩学	35	40	
計	1020	1020	1020



資料7 米国フロリダ州セント・ピーターズ市の市長夫妻を迎えてのファッションショーの写真1968（昭和43）年『田中千代認証校 吉田愛服装学園』

年以上続いた。ディオール科は卒業後に確実に独立できる人材の養成を目指していた。この科ではデザインの研究と実技の指導と点検が、直接ディアールのアシスタント（当時の鐘淵紡績、現在の鐘紡がクリスチャン・ディオールとライセンス契約を結んでいた）によって行われた。大阪スタジオ（鐘淵紡績、クリスチャン・ディオール縫製工場）から外注の注文を受け、「ミス・ディオール」の縫製・仕立てた（資料8）。約10人の生徒が携わっており、午前中は授業で、午後から17時頃まで注文服の縫製をした。縫製代（仕立て代）は生徒のおこづかいとなった。このカリキュラムには1968（昭和43）年より、田中が鐘淵紡績の特別顧問を務めていたこと、またその頃、娘で副校長の岩田稔子氏が東京のカネボウ・ブライダル（結婚衣装）部門のドレス製作と指導を専門に担当していたことも関係していると考えられる。加えて、クリスチャン・ディアールの他に三洋商会の外注の注文も受け、縫製・仕立てに携わっていた。

これに関して、吉田は1977（昭和52）年1月5日「吉田愛服飾専門学校『まど』第18号」で「本校はここ数年来、洋裁技術の向上と多様化に備えて、特に実技面の指導の強化を、生のファッション界との直結で行っております。たとえば過去、現在を通じて常に世界のファッション界のリーダーシップを取っておりますパリのクリスチャン・ディアールの



資料8 1976年秋冬ミス・ディオール縫製 高等実技研究生
1977（昭和52）年1月5日「吉田服装専門学校『まど』第18号」

デザインとか技術面の優れた技法をいち早くキャッチしてその指導の万全をきいております」、続けて卒業生の就職について、「単に一地方に通用する技術者にとどまらず、あくまで国際服の技術者にふさわしく世界中この方面のどこにも通用する技術者の育成を目指しております」と述べている。ここに世界的に「生きた服飾界」で活躍できる裁縫技術を持ち合わせた人材を育成したいという吉田の熱意を確認できる。

ところで教員について、洋裁教師の人数は15名でその他助教師数名をはじめとして、色彩・デザイン・染色は香川大学教育学部教授の石井輝雄氏、一般教

養は娘婿等3名，時事問題，英会話，硬筆，手芸，料理，華道，お煎茶，フラワーデザイン，手芸，美容芸術等を教授する講師⁴⁶⁾を迎えていた。そしてクラブ活動も活発に行われ，学園での教育は洋裁のみならず多彩に展開された。

7. 吉田愛の実践思想—洋裁教育への想い

吉田の活動は半世紀以上になるが，その間，洋裁一筋，一貫して洋裁教育の第一線に立った。その様子を吉田は1973（昭和48）年12月27日「吉田愛服装学園『まど』第16号」の「洋裁と共に35周年」と題した文章中で，「メジャー片手に次々と入れ代わる若い生徒さん方や先生方を相手に，明けても暮れても洋裁の技術を身につける素晴らしさをとき続けながら，一にも洋裁，二にも洋裁で過ごしてまいりました四十有余年です」と述べている。吉田は度々記念パンフレット，新聞等で洋裁教育への想いを語っている。それらから，吉田の人間観や教育観などの教育理念を把握することができる。

「洋裁という技術の指導を通して美しい人間形成の段階にまで到達出来れば，どんなにか素晴らしいことだろうかと若い生徒さんを前に，念願する毎日でございます。」

（『吉田愛服装学園 創立二十五周年記念』，「私のことば」より）

「美しい服を作りますには，常に素直な心とよい感覚，そして正確な判断による正しい裁断と縫製が必要である。（略）服装はその人柄のあらわれとか申しますが，専門的な洋裁の技術とデザインを勉強することによって，世界中に通じる女性の職業として，また，豊かな家庭を建設される未来の主婦としてのお勉強に一番ふさわしいものであります。と同時に，この洋裁の勉強の場こそ，若い時代の人間形成に最も必要な修練に場であることを確信いたします。」

（『四国唯一の田中千代認証校 吉田愛服装学園』「私の言葉」より）

学則の目的には「人格の練磨」を掲げ，人間性を

重要視していた吉田の人間観を確認できる。吉田が目指したのは，教育者としての洋裁指導と服飾デザイナーとしてのより美しいドレス作りの研究である。吉田は教育者とデザイナーであることの両方を明確に意識しており，「思い切ったもの，奇抜なものを作ればお金になりますが，私はデザイナーであると同時に教育者であることを考えますと，あくまで基本的なものを追求していかなければなりません。デザインはかなめ的美と芸術がかみ合わなければ良いものは生まれません」と述べているが，デザインについては，常にシンプルさを心掛けたもの⁴⁷⁾



資料9 NDC出品作品 1967（昭和42）年秋
1970（昭和45）年12月10日「吉田服装専門学校『まど』第13号」



資料10 NDC出品作品 1967(昭和42)年秋
1968(昭和43)年『田中千代認証校 吉田愛服装
学園』

を好んでいた。

前者では「職業的洋裁技術を身に付ける」洋裁家の育成に尽力し、地方に通用する技術者にとどまらず、国際服の技術者にふさわしく世界に通用する洋裁技術者の育成を目指していた。

そして後者では「デザイナーは個性を発揮できる仕事、停年のない職業」と述べ、常に自身の勉強を欠かさなかった。吉田は1958(昭和33)年4月26日に開催されたピエール・カルダンの技術講習会に参加した。それはNDC(日本デザイン文化協会)が主催した講習会であったが、カルダンの招へいが実現したのは恩師である田中氏の人脈によるところが大きかった。田中氏はカルダンの古くからの友人だということで関係していた。田中氏から贈られた『田中千代 日本最初のデザイナー物語』224頁には「愛参加」「この講習会は素晴らしかった」⁴⁸⁾と吉田の直筆が残っている。また吉田は、服飾デザイナーとしてNDC(日本デザイナーズクラブ)主催の大阪サンケイホールでのショーにも作品を出品(資料9:昭和42年秋)、(資料10:昭和45年秋)した。

吉田は「いつも新鮮で、目まぐるしく、そして退屈しないのが洋裁技術の世界」,「デザインを考えている時が幸せ」,「私は洋服のことしか分からない。洋服のいろいろな生地の中に埋まってデザインを考えるのが最高の幸せ」と洋裁への想いを語っている。さらに「デザインの仕事は、先のことを見分ける能力が大切」と言い、実際に宇宙時代に先がけて、1967(昭和42)年宇宙服のファッションを発表し、1973(昭和48)年の第一次オイルショックより前の「消費は美德」の時代にリフォーム教室を開設⁴⁹⁾した。

8. おわりに

吉田愛は日本における服飾デザイナーの草分け的存在である田中千代の初期の生徒であり、1936(昭和11)年に神戸市御影の田中千代洋裁教室へ入学した。そして卒業後は青木の定義する「第二世代の服飾デザイナー」として神戸と高松の二か所でそれぞれ洋裁研究所と洋裁教室を経営し、都市と地方を結ぶ服飾界のかけ橋となった。また服飾デザイナーとして、渡米しオリジナルショーを開催するなど、国

際色豊かな活動の中で、日本らしさと郷土の伝統美を生かした作品を多数発表し、日本と外国とのかけ橋となった。吉田の洋裁、洋裁教育への意欲と情熱は、高松の女性の洋裁技術・洋装センスを育てる役割を果たし、郷土の服飾文化の発展に貢献したことが明らかになった。そして今日、吉田愛服飾専門学校は創設者である吉田の教育理念を受け継ぎ、県下唯一の服飾系専修学校として服飾文化の醸成に尽力している。

戦後復興期の日本における洋裁学校の普及が洋装化と人々の服装水準の向上に役立ったことは明確であるが、中学校または高等学校卒業後の青年・成人期女子教育の拡大に主要な機能をもっていたという点においても社会的意義があり評価することができる。それは洋裁学校が、青年・成人期の女性の課題である家庭と社会進出すなわち服飾・ファッション分野の職業社会に対して、それぞれへの参入をより有利にする教育機関として機能していたことを意味している。洋裁学校は、「制度化されていない学校」である私立各種学校として存在してきたが、服飾・裁縫という専門教育において、学校教育制度の補完的、専門職業教育の中核機関として実際の役割を担っていた。そして1976（昭和51）年の学校教育法の改正により専修学校制度が成立してからは、専門学校の認可を受ける学校もあり、高等学校卒業後の高等教育機関として、服飾技術者を育成し、日本のファッション産業を支えてきた。しかし近年では、職業的裁縫技術の習得を目的とする入学者もいるが、社会・産業構造の変化により、既製服、服飾製品の海外生産の増加、または大学への進学者増加ゆえにその数は減少し、休校や閉校状態の学校が増加している。しかもこれらの学校では、大半が機関紙の発行や学校史の編纂をしておらず、学校関連資料の散逸も時間の問題だと推測される。加えて創設時から事情を知る関係者は総じて高齢にあり、今後は聞き取りによる情報収集は困難が予想される。

今後も課題として、「正規の学校」以外の女子教育が実際的な役割を担いながらも、戦後の復興期から経済成長期にかけて設立された地域の私立各種学校が、和裁・洋裁、編物手芸教育をどのように実践したのか。女子教育史・家政教育史のなかで、従来焦点の置かれなかった専門教育（服飾・裁縫）の視

点から考察していきたい。

謝 辞

本稿執筆においては、吉田愛服飾専門学校の吉田弘子校長先生には度重なる訪問による聞き取り調査や長期間にわたり貴重な資料をお借りしご協力賜りましたことに心より感謝いたします。

研究の一部は、日本家政学会第65回大会（昭和女子大学）にて発表した。

註

- 1) 土方苑子編, 2008, 『各種学校の歴史的研究－明治東京・私立学校の原風景』東京大学出版会.
- 2) 稲垣里佳子・鶴殿篤・小野方資・蔵澄裕子・小林正泰・瀬川大・辻直人・多和田真理子・藤井康之・吉田昌弘・土方苑子, 2001, 「各種学校の研究－東京市を中心に－」『東京大学大学院教育学研究科紀要』41, 23-39.
- 3) 土方苑子, 2008, 「日本教育史における公・私立学校－各種学校を手がかりとして－」『教育史学会紀要』51, 100-103.
- 4) 小山裕子, 1995, 「『各種学校ノ願伺届録』にみられる裁縫女学校の教育（その1）－明治20年代の東京府を中心に－」日本女子大学教育学科の会編『人間研究』31, 33-38.
- 5) 朴木佳緒留, 2000, 「家庭科教育史研究の課題と展望」『日本教育史研究』19, 57-70.
- 6) 横川公子, 村田裕子, 藤本純子, 徳山孝子, 青木美保子, 松井寿, 山本泉, 平光睦子, 井上雅人, 森理恵, 松本由香
- 7) 横川公子編, 2006, 『関西文化研究叢書別巻 洋装文化形成に関わった人々とその足跡－インタビュー集その1－』, 武庫川女子大学関西文化研究センター.
- 8) 横川公子編, 2007, 『関西文化研究叢書別巻 洋装文化形成に関わった人々とその足跡－インタビュー集その2－』, 武庫川女子大学関西文化研究センター.
- 9) 横川公子編, 2009, 『関西文化研究叢書別巻

- 洋装文化形成に関わった人々とその足跡－インタビュー集その3－』、武庫川女子大学関西文化研究センター。
- 10) 横川公子編, 2012, 『関西文化研究叢書別巻 洋装文化形成に関わった人々とその足跡－インタビュー集その4－』、武庫川女子大学関西文化研究センター。
- 11) 横川公子編, 2009, 『関西文化研究叢書11 関西における洋装文化形成に関する研究』武庫川女子大学関西文化研究センター。
- 12) 青木美保子, 2009, 「服飾デザイナーと洋裁学校」『関西文化研究叢書11 関西における洋装文化形成に関する研究』武庫川女子大学関西文化研究センター, 69参照。
「洋裁技術を洋裁学校で学ぶことが社会のなかで馴染みのなかった時代に、恵まれた境遇にあって、かつ時代を先取りする才知を持った一握りの人達が、洋裁技術を海外で学び、帰国後、服飾デザイナーとして活動する傍ら洋裁学校を運営していた。そして、このようにして洋裁技術を日本に持ち込んだ服飾デザイナーの後を追う形で、先見性をもった行動あふれる女性達は、その洋裁学校で生徒として洋裁技術を学び取り、次の世代の服飾デザイナーあるいは洋裁学校の経営者として洋裁文化を普及させた。わが国の服飾界で、このような服飾デザイナーは、前者を第一世代の服飾デザイナーとすれば、後者は第二世代の服飾デザイナーとして位置づけることができよう。」
- 13) 榎田真澄, 2009, 『男女平等教育阻害の要因 明治期女学校教育の考察』, 明石書店, 21-29.
- 14) 吉田愛, 1996, 『服飾デザイナー吉田愛60年のあゆみ』
- 15) 同前書, 大西潤甫「序にかえて」『服飾デザイナー吉田愛60年のあゆみ』
- 16) 1987(昭和62)年10月27日『四国新聞』
- 17) 1968(昭和43)年12月10日「吉田愛服装学園『まど』第11号」
- 18) 前掲, 吉田, 62.
- 19-20) 前掲, 1987(昭和62)年10月27日『四国新聞』
- 21) 1987(昭和62)年4月29日『毎日新聞』
- 22) 中山千代, 1987第一版・2010新装版『日本婦人洋装史 新装版』, 吉川弘文館。
- 23) 前掲, 1987(昭和62)年4月29日『毎日新聞』
- 24) 1987(昭和62)年4月29日『朝日新聞』
- 25) 吉田愛服装学園, 1973, 『創立35周年記念 田中千代服飾講演会 色彩で見る世界のコスチューム』パンフレット
- 26) 前掲, 1987(昭和62)年10月27日『四国新聞』
- 27) 1973(昭和48)年12月27日「吉田愛服装学園『まど』第16号」
- 28) 増田美子編, 2013, 『日本服飾史』, 東京堂出版, 157.
- 29) 高松百年史編集室, 1990, 『高松百年史 資料編』, 576-569.
- 30) 前掲, 吉田, 6.
- 31) 同前書, 55.
- 32) 前掲, 『まど』第11号
- 33) 前掲, 増田, 165.
- 34) 1977(昭和52)年1月5日「吉田愛服飾専門学校『まど』第18号」
- 35) 前掲, 『まど』第16号
- 36) 前掲, 1987(昭和62)年10月27日『四国新聞』
- 37) 前掲, 『創立35周年記念 田中千代服飾講演会 色彩で見る世界のコスチューム』パンフレット
- 38) 前掲, 吉田愛服装学園『創立35周年記念 田中千代服飾講演会 色彩で見る世界のコスチューム』パンフレット
- 39) 前掲, 『まど』第16号
- 40) 西村勝, 1994, 『田中千代 日本最初のデザイナー物語』, 実業之日本社。
- 41) 1975(昭和50)年10月1日「吉田愛服装学園『まど』第17号」
- 42) 前掲, 西村, 田中千代年譜。
- 43) 『田中千代認証校 吉田愛服装学園』パンフレット
- 44) 1970(昭和45)年12月10日「吉田愛服装学園『まど』第13号」
- 45) 前掲, 『まど』第16号
- 46) 前掲, 『田中千代認証校 吉田愛服装学園』パンフレット
- 47) 1962(昭和37)年4月27日『四国新聞』
- 48) 前掲, 西村, 224.
- 49) 前掲, 1987(昭和62)年4月29日『朝日新聞』